



Title	林羅山「寄朝鮮國三官使」に関する考察
Author(s)	関, 雅泉
Citation	研究論集, 16, 45(右)-63(右)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.r45
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63916
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_013_guan.pdf



林羅山「寄朝鮮國三官使」に關する考察

関 雅 泉

要 旨

江戸時代初期の幕府の朝鮮に對する外交政策上、通信使の招待は重要な政策であり、日朝兩國の政治、文化、經濟などの交流を促すのに、深い意味があつた。寛永十三年の朝鮮通信使の來日に際して、林羅山は幕府の文教、外交の責任者として通信使と交渉した。「寄朝鮮國三官使」は、羅山が寛永十三年に著した外交書簡であり、羅山の學問と思想的特徴の一端を窺い知ることができる。本稿では、「寄朝鮮國三官使」を中心に、その成立背景及び羅山の見解を明らかにした上で、書簡における通信使への七つの質問について詳らかに分析し、そこに見える羅山の思想と意圖を検證してみたい。羅山は朝鮮の學者に對して、高い見識を示したが、その質問は中國の思想と歴史觀の影響を受けていたことが確認できる。また、この書簡には、朝鮮を日本の藩國とみなす意圖が窺え、彼の強い國家意識が認められる。

はじめに

「寄朝鮮國三官使」(『羅山林先生文集』卷第十四「外國書下」所収)は、林羅山(一五八三〜一六五七)が寛永十三年(一六三六)十二月八日に著し、個人的に朝鮮通信使の任統(一五七九〜一六四四)、金世濂(一五九三〜一六四六)、黃屺(一六〇四〜一六五六)の三人に宛てた最初の書簡である。

朝鮮通信使とは、室町時代から江戸時代にかけて、李氏朝鮮から

幕府へ派遣された政府間の使節團である。十五世紀の初め、室町幕府の三代將軍足利義滿(一三五八〜一四〇八)と李氏朝鮮の第三代國王李芳遠(一三六七〜一四二二)が、明朝の皇帝によつて國王として冊封されたことにより、日本と朝鮮は華夷秩序のもとに平等の國となった。足利義滿は積極的に明朝や朝鮮との貿易を展開し、朝鮮へ使者を派遣した。これに對して、李氏朝鮮も返禮として、國書を携帶した使節團を日本へ派遣し、足利將軍に謁見させた。

通信使の派遣は日韓兩國の文化交流の重要な手段であり、朝廷の

主な外交政策である。室町時代には、朝鮮通信使は三回来日し、豊臣秀吉（一五三六―一五九八）が全國統一を成し遂げた後も、朝鮮側は、日本へ使者を二度派遣した。しかし、秀吉の朝鮮出兵（文祿・慶長の役）により、日韓兩國の關係は惡化し、外交が途絶えた。

江戸時代には朝鮮から再び使者を派遣するようになった。慶長十二年（一六〇七）から文化八年（一八一二）にかけて十二回派遣した。その中、最初の三回の使者の来日目的は、徳川幕府の朝鮮國王への返答の要求と、文祿・慶長の役で捕虜となった朝鮮人の釋放要求にあった。朝鮮側では「回答兼刷還使」と呼んでいる。寛永十三年の第四回目から、朝鮮側は「善隣友好」を目的とした朝鮮使者團を「通信使」と改名した。徳川幕府が朝鮮通信使を接待し、林羅山は最初の六回に参加した。第四回目から、羅山は幕府の外交に深く關與し、朝鮮使者と交渉していた。

寛永十年（一六三三）、徳川幕府は徳川將軍を「大君」と呼稱するよう朝鮮に傳え、寛永十三年、日本に派遣された通信使は「大君」號を正式に使用し、大君外交體制が確立された。羅山は、體制の革新の主要な推進者として、重要な役割を果たした。

中國では、從來、林羅山と朝鮮通信使との交渉に關する研究はなかったが、日本では、阿部吉雄^五、李元植^六、金仙熙^七は林羅山と朝鮮通信使の關わりに論及している。ただし、林羅山が朝鮮通信使に宛てた書簡「寄朝鮮國三官使」に關する研究にはなされていない。本稿では、林羅山の書簡「寄朝鮮國三官使」を中心に、當時の日朝の歴史背景や羅山の思想的特徴について詳細に檢證してみたい。

「寄朝鮮國三官使」を中心として檢證する理由は、主に以下の三點である。第一に、江戸時代に朝鮮側が初めて「通信使」として使者を派遣した時の書簡だからである。第二に、羅山が幕府の文教と外交を担当し、日本の大君外交體制確立に寄與しているからである。第三に、「寄朝鮮國三官使」は羅山個人が使者に宛てた書簡で、羅山の思想の一端を窺い知ることができるからである。

一、「寄朝鮮國三官使」の成立背景及び羅山の見解

「寄朝鮮國三官使」は、羅山が幕府の文教、外交の責任者となつてから、個人的に朝鮮通信使に宛てた最初の書簡である。慶長十五年（二六一〇）、羅山は勅令により初めて幕府の外交文書「遣大明國」^八（『羅山林先生文集』卷第十二所収）を起草し、五山の僧が外交文書起草を獨占していた慣例を打ち破った。同時に、「遣福建道陳子貞」も執筆した。その後の一年間に、羅山は「答南蠻舶主」「諭阿媽港」「寄阿媽港父老」「諭阿媽港諸老」「呈呂宋國王」「呈占城國王」（以上『羅山林先生文集』卷第十二所収）などの六つの外交文書を起草した。しかし、慶長十七年から、二代將軍秀忠は外交文書起草の事務を金地院崇傳（一五六九―一六三三、臨濟宗禪僧）に引き繼がせた。その時から元和八年（一六二二）に至るまで、羅山は一度も國書を起草することがなかった。

元和九年（一六二三）、秀忠が將軍職を三代家光に譲ると、同年閏八月、羅山は再び國書「答暹羅國」を起草し、寛永元年（一六二五）

に「寄朝鮮國副使姜弘重」、二年に「答大明福建都督」を起草した。この頃から、幕府の外交文書起草の事務は次第に羅山の担当となった。寛永十年に、崇傳が死去してから、羅山が幕府の文教、外交の實權を掌握した。寛永十二年に、對馬藩主の宗義成（一六〇四～一六五七）が、幕府と李氏朝鮮の間で交わされた國書を偽造し、家臣の柳川調興（一六〇三～一六八四）に告發されるという「柳川一件」が起こった。この事件は、君臣間の不和である御家事件から、後に國家間の外交的な事件となった。この「柳川一件」が發生してから、羅山は幕府の李氏朝鮮への國書起草の事務、及び朝鮮通信使との往復書簡の仕事に携わるようになった。

寛永十三年の通信使との交渉では、羅山は「日本國大君」を幕府將軍の正式な外交稱號として使い、そして、初めて日本の年號、つまり「寛永十三年十二月二十七日」を書簡の最後に記した。『羅山先生文集』の編集者である息子の林鷺峰は、日本の年號を用いたことについて、

此の教書、高低平頭、本書の式の如し。是より先、朝鮮來貢すること數回、足利家の舊例に隨ひ、禪林の徒をして返簡を裁せしむ。今般先生此の事に預かる。又舊例朝鮮に遣はすに、書するにただ干支を記すのみ。今般初めて年號を記す。（『羅山林先生文集』卷第十三「外國書中」）

と述べている。従来の日本の國書では年號を記せず、干支を書くだけであった。羅山は日本の年號を使用し、國書の様式を改めることによつて、日本が朝鮮と違つて、明朝の冊封國ではなく、獨立國で

あることを示し、明朝の年號を記していた朝鮮より高い外交的な地位を表したいと思われる。

羅山の早年の文章「王仁」では、朝鮮と日本の關係について、次のように述べている。

王仁は、百濟國の人なり。吾が應神の曆に、其の國貢し來る。初め仲哀皇帝八年、神託有り、皇后新羅國を征せんとす。帝疑ひて發せず。九年春二月、帝俄爾として崩ず。是に於いて皇后神功、帝の神の言を用ゐずして殂落するを懼る。冬十月、海に浮びて新羅に到る。新羅王、我が旌旗器仗の莊麗なるを見て、曰く、「傳へ聞く東海に神國有り、名を日本と曰ふ。此れ是れ其の神兵か。敵すべからざるなり。」と。乃ち素服面縛にして頸に繋ぐるに組を以つてす。自ら圖籍持して海埂に來りて曰く、「願くは毎歲金銀縑帛八十船を貢し、敢へて此の國を屠らざるを。」と。此の時、高麗、百濟二國の主、新羅の我に降るを聞き、密かに軍勢を謀す。其の克たざるを知りて、又自ら急に馳せて欸を納めて曰く、「今より以往、永く西藩と稱し、朝貢を絶やさず。」と。茲より三韓皆我に貢す。（『羅山林先生文集』卷第三十九「小傳」）

羅山によれば、應神天皇の時代に、百濟がすでに日本に朝貢している。神功皇后は仲哀天皇が新羅を征伐せよという神の宣託に沿わなかったために崩御したと恐れ、新羅を遠征した。新羅國王は日本が神國で、日本兵は神兵だと思い、日本の敵となる勇氣がなかった。それで、高麗と百濟も日本を怖がり、甘んじて日本に朝貢し、西藩

と自稱したというのである。この日本を神國とする觀念は、羅山の思想の顯著な特徴の一つである。彼はまた、「我朝神國なり。神道乃ち王道なり」（『羅山林先生文集』卷第六十六「隨筆二」）とも述べている。さらに、羅山は日本について、次のように誇りに思い、強い歸屬意識を持っている。

日本と中華とは域を殊にすと雖も、然れども大瀛海上に在りて、朝暾旭輝の煥耀する所、洪波層瀾の漲激する所なり。五行の秀、山川の靈、人物を鐘く、故に號して「君子の國」と曰ふ。昔、治教清明の世、才子智人、間に輩出す。氣豈に異域に讓らんや。時に古今有るも、理に古今無し。「豪傑の士、文王無し」と雖も、猶興起す。」故に立志を尚ぶ。（『羅山林先生文集』卷第七十三「隨筆九」）

羅山によれば、日本は中國から遠く離れている島國だが、山河が麗しく、政治もよく治まって、傑出した人物が輩出しているので、中國に比べて決して見劣りしないのである。羅山が引用した「豪傑の士、文王無し」と雖も猶興起す」という文句の出典は、『孟子』盡心上「文王を待ちて後に興る者は、凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王無しと雖も猶興る」である。豪傑は志を立てて發奮し、自分の力を盡くして國を隆盛にさせるといふ。羅山は日本について道德のある「君子の國」だと思っている。

羅山の神國思想と國家意識の本質は、中華帝國を中心とした伝統的な「華夷秩序」から離れ、日本を中心として新しい東アジア秩序を作ることにあつたと思われる。朝鮮は華夷秩序の重要な一員で、

明朝に藩國の模範とされていた。ゆえに、日本と海で隔てられた朝鮮との關係は、明朝の周辺外交の重要な一環であつた。羅山の朝鮮に對する見解は、彼の國家意識の表われである。彼が將軍の外交上の稱號を固定化し、日本が年號を國書に記したのは、形式上、中華觀念の束縛を脱するためであつたと考えられる。

以上では、「寄朝鮮國三官使」の成立背景及び羅山の朝鮮に對する見解を明らかにした。次に、「寄朝鮮國三官使」をめぐって、羅山の思想を詳らかに論じてみたい。

二、「寄朝鮮國三官使」について

羅山が「寄朝鮮國三官使」を起草した時、つまり、寛永十三年十二月八日に、朝鮮通信使任統、金世濂、黃尿の三人はすでに江戸に到着していた。將軍は大炊（土井利勝）と讃岐（酒井忠勝）に出迎えさせた。金世濂『海槎錄』では、「初八日戊寅晴、江戸に留まる。關白執政二人を遣はし、問安の禮を行ふ。一は大炊と曰ひ、一は讃岐と曰ふ」（『東溟集』卷十、韓國文集叢刊第九十五輯、民族文化推進會、一九九二）と記録している。これによって、羅山は「寄朝鮮國三官使」を執筆した際に、まだ三使者に會つていなかったことが分かる。

「寄朝鮮國三官使」では、羅山は朝鮮に關する七つの質問について使者に教えを請うている。書簡の冒頭では、「朝鮮國の奉命使來りて、觀國の實^九と爲る。想ふに其れ仕學に優れるか。平素思問の疑、多端

有りとも、先づ貴國の事跡に就いて以て之れを質さん」と述べている。羅山は三使者を君主に重用された「觀國の賓」であると尊稱し、學識が深く廣いので、朝鮮の事績について質問したいと述べている。次に、羅山の思想を究明するために、この七つの質問を一つ一つ分析したい。

質問一

〔原文〕聞説檀君享國一千餘年。何其如此之長生哉。蓋鴻荒草昧、不詳其實乎。抑檀君子孫苗裔承襲遠久至此乎。怪誕之說、君子不取也。且中華歷代之史、朝鮮三韓傳備矣。而皆不載檀君之事、何也。以齊東野人之語故乎。

〔訓讀〕聞く説らく檀君國を享くること、一千餘年と。何ぞ其れ此くの如くの長生ならんや。蓋し鴻荒草昧にして、其の實を詳にせざるか。抑々檀君の子孫苗裔、承襲すること遠久にして此に至るか。怪誕の說、君子取らざるなり。且つ中華歷代の史、朝鮮三韓傳備はれり。而して皆檀君の事を載せざるは、何ぞや。齊東野人の語を以ての故か。

羅山は、朝鮮の建國者・檀君のことについて質問している。檀君は、名は王儉。高麗の僧人・一然（一二〇六〜一二八九）が著した『三國遺事』⁺（全五卷）卷一に『魏書』に云く、乃ち往く二千載、檀君の王儉有り、阿斯達に都を立て、國を開き、朝鮮と號す。……國を御すること一千五百年」とある。これによれば、王儉は古朝鮮

の建國の君主で、一千五百年間も國を治めたという。一方、金富軾⁺（二〇七五〜一一五一）が編撰し、新羅、百濟、高句麗の三國の歴史を記録した正史『三國史記』（一一四五年成立、全五〇卷）では、「二十一年、春二月、王、丸都城亂を経るを以て、都を復すべからず。平壤城を築き、民及び廟社を移す。平壤は、もと仙人王儉の宅なり。或いは王の王儉に都すと云ふ」（「高句麗國本紀」第五）と述べている。これによれば、高句麗では王儉を「仙人」と見なし、傳説上の人物としているのである。だが、『三國遺事』によって、檀君は朝鮮の歴史上の人物として崇拜され、史實とされた。

『三國遺事』で言及している「魏書」は、西晉の史學家・陳壽（二三三〜二九七）が著した『三國志』の「魏書」を指していると思われる。ただし、現存する『三國志』魏書三十「韓傳」には、朝鮮半島の三韓に關する記載は見られるが、檀君に關する記述はない[±]。また、北齊の魏收（五〇七〜五七二）が著した『魏書』は、紀元前四世紀末から六世紀中葉までの北魏の歴史を記録したものであるが、現存する版本には檀君の記載がない。范曄（三九八〜四四五）の『後漢書』「東夷列傳」には、三韓の歴史しか記載していない[±]。

羅山は中國の歴史を熟知していたので、あえてこの質問を出した。古朝鮮では、檀君という人物が實在して、千年以上に生きた可能性がないからである。もし彼の子孫が代々繼いだというなら、合理的だと言えよう。しかし、中國の史書では三韓の歴史を書き残しているのに、偉大な建國者である檀君に關する記載はない。羅山は、朝鮮の檀君の説はあやしいことで、君子の言葉ではないと批判し、さ

らに、『孟子』の「齊東野人の語」(「萬章上」)を引用し、檀君の説をでたらめな話しだと非難している。

檀君神話の誕生の歴史的な背景には、十三世紀以降モンゴルの高麗侵入がある。當時、モンゴルが中國を統治し、元王朝が成立した。漢民族を中心とした華夷秩序は崩壊してしまった。昔、中國殷王朝の賢人・箕子は文明を朝鮮にもたらして、教え導いたとされ、朝鮮半島の歴代の王朝において尊崇されていた。夷狄の侵入による民族主義がかつてないほどに高まっていた朝鮮では、本國の偉大な人物は人民に崇拜される必要があつたのであろう。朝鮮半島の人民は檀君の傳説を信じていた。

ただし、檀君の傳説については朝鮮でも意見の不一致が見られる。例えば、朝鮮時代に編纂された代表的な歴史書『東國通鑑』(一四八四年成立)卷一では、「東方初に君長無し。神人檀木の下に降る有り。國人立てて君と爲す。是れ檀君と爲す。國は朝鮮と號す。是れ唐堯戊辰の歲なり。初めて平壤に都し、後に都を白嶽に徙す。商の武丁八年乙未に至り、阿斯達に入り神となる。」と述べている。この歴史について、編者の徐居正(一四二〇—一四八八)、崔溥(一四五四—一五〇四)等は、「唐虞より夏商に至るまで、世漸く澆漓たり。人君國を享くること久長なるは、五六十年に過ぎず。安んぞ檀君獨り壽千四十八年有りて、以て一國を享けんや。其の説の誣なることを知るなり」と批判している。檀君が千年以上國を治めたことは偽説だと明らかにしたのである。もし檀君開國が神話であつたら、文學の範疇にあり、批判することはできない。しかし、もし歴史書に載せ、

史實だとしたら、考證を徹底する必要がある。朝鮮檀君の信憑性についての質疑には、羅山の合理的な史觀が確かにあらわれているが、それより、もつと注目すべきところは、彼の鋭く辛辣な言葉遣いが、朝鮮通信使にきまりの悪い思いをさせたと思われることである。

質問二

「原文」箕子遭殷亂、避地朝鮮。或曰、「武王封之。」然貴國俗稱、「箕子來、其從者五千人。故云半萬殷人渡遼水。」此事中華群書未之見也。欲知其所據。

「訓讀」箕子殷の亂に遭ひて、地を朝鮮に避く。或ひと曰く、「武王之を封ず」と。然れども貴國俗に稱す、「箕子來りて、其の從者五千人。故に云く、半萬の殷人遼水を渡る」と。此の事中華の群書に未だ之を見ざるなり。其の據る所を知らんと欲す。

羅山はさらに朝鮮の歴史について質問している。箕子朝鮮は、檀君傳説の後の時代である。箕子が殷の亂を避けるために朝鮮へ逃げたことは、中國の史書に記載がある。箕子は、名は胥余、文丁の子で帝乙の兄。殷王朝末期、紂王が暴虐非道で愚昧無知な君主であつたため、叔父の箕子は紂王に極諫したが、無駄であつた。胸を痛めた箕子は、成湯(名は天乙、商朝の初代王)が建てた國家がこのまま壊滅されることを見るに忍びなかつたため、髪を散らし、とぼけたふりをして、牢に入れられてしまった。その後、武王が紂を伐つ際に、箕子はその亂に乗じて逃げ出し、朝鮮半島に着いた。周の武

王は治國の道を請うために、箕子を訪ねた。そこで、箕子は「洪範」を作ったという^{十四}。武王は箕子の才能に感心して重用しようとしたが、箕子に斷られた。そこで、武王は箕子を朝鮮に封じて、臣下としなかった。史書には、「ここに於いて、武王は箕子を朝鮮に封じて、臣とせざるなり」（『史記』『宋微子世家』）とある。箕子は朝鮮に禮儀をもたらし、「八條禁法」を實施して人民を教化し、安定な社會を作ったとされる。

また、『漢書』『後漢書』『三國志』も、箕子が朝鮮に入ったことを次のように記している。

『漢書』『地理志下』には、「殷の道衰へ、箕子去りて朝鮮に之く。其の民を教へて禮義を以てし、田蠶織作こる。樂浪朝鮮の民禁八條を犯す……是を以て其の民終に相盜まず、門戸の閉づる無く、婦人貞信にして淫辟ならず」と記されている。

『後漢書』『東夷列傳』には、「昔、武王箕子を朝鮮に封ず。箕子教ふるに禮義田蠶を以てし、又八條の教を制す。其の人終に相盜まず、門戸の閉づる無し。婦人貞信にし、飲食するに籩豆を以てす。其の後四十餘世、朝鮮侯準に至り、自ら王を稱す」と記されている。

『三國志』魏書三十「濊傳」には、「昔、箕子既に朝鮮に適き、八條の教を作り以て之を教ふ。門戸の閉づる無くして民盜をなさず。其の後四十餘世、朝鮮侯準は僭して王を號稱す」と記されている。

朝鮮史書『東國通鑑』外紀「箕子朝鮮」では、『漢書』『地理志』の箕子朝鮮に關する記述を抜き書きした上で、次のように涵虛子の評語を加えている。

関 林羅山「寄朝鮮國三官使」に關する考察

涵虛子亦た曰く、「箕子中國の五千人を率ゐて朝鮮に入る。其の詩書、禮樂、醫巫、陰陽卜筮の流、百工技藝皆從ひて焉に往く。既に朝鮮に至り、言語通ぜず、譯して之を知らしむ。教ふるに詩書を以てし、其をして中國禮樂の制、父子君親の道、五常の禮を知らしむ。教ふるに八條を以てし、信義を崇び、儒術を篤しく、中國の風を醸成す。教ふるに兵闘を尚ぶ勿かれを以てし、徳を以て強暴を服す。鄰國皆其の義を慕ひて之に相親しむ。衣冠制度、悉く中國に同じ。故に曰く、『詩書禮儀の邦、仁義の國なり。而して箕子之を始む。豈信ならざらんや。』（『朝鮮群書大系續第三輯、朝鮮古書刊行會、一九二二）

涵虛子とは、明の太祖朱元璋の十七男朱權（一三七八～一四四八）である。以上の内容は朱權が編纂した『天運紹統』（二卷、一四〇六年成立、ハーバード・イエンチン圖書館所蔵）に記載されている。

箕子が五千人を率いて朝鮮に入ったかどうかは、羅山が生きている時代より二千年以上も前のことである。また、客觀的に言うところ、中國から朝鮮に行った人数は重要ではない。羅山が「箕子來りて、其の從者五千人、故に云く、半萬の殷人遼水を渡る」と質問したのは、朝鮮の歴史の粗探しをして、わざと使者に難癖をつけるに等しいものであった。

質問三

「原文」唐太宗之伐高麗也、飛矢中其目而還。故李穡云、「那知玄花落白羽。」白羽、箭也。玄花、目也。聞是貴國之美談也。按『舊・

新唐書』『通鑑』皆無此事。可謂中華諱而不言之乎。鄆陵之戰、晉呂錡射楚共王之目。淮南之役、漢帝中流矢幾殆。皆是記而不諱也。所以爲實錄也。以萬乘之主、傷高麗箭、奈何其得秘而匿哉。然則此非貴國之美談、而一方之私言歟。願聞其辨。

〔訓讀〕唐の太宗の高麗を伐つや、飛矢其の目に中りて還へる。故に李穡云く、「那ぞ知らん、玄花の白羽を落とすを。」白羽は、箭なり。玄花は、目なり。聞く是れ貴國の美談なり。按ずるに『舊・新唐書』『通鑑』皆此の事無し。中華諱みて之れを言はずと謂ふべきか。鄆陵の戦に、晋の呂錡、楚の共王の目を射る。淮南の役に、漢帝流矢に中りて幾んど殆し。皆是れ記して諱まざるなり。實録爲る所以なり。萬乘の主を以て、高麗の箭に傷つけば、奈何ぞ其れ秘して匿すを得んや。然らば則ち此れ貴國の美談に非ずして、一方の私言か。願はくは其の辨を聞かん。

唐の太宗李世民が高麗を征伐した歴史は、『舊唐書』『新唐書』『資治通鑑』に、記録がある。『舊唐書』卷六十九に「(貞觀)十九年、太宗高麗を伐つ。皇太子定州國を監る。士廉、太子太傅を攝し、仍つて朝政を典る」と記録している。『新唐書』本紀第二「太宗」にも、「十九年二月庚戌、洛陽宮に如き、以て高麗を伐つ」と記録している。『資治通鑑』卷第一百九十七には、「貞觀十九年二月庚戌、上(太宗)自ら諸軍を將ゐて洛陽より發す。……三月丁亥、上、侍臣に謂ひて曰く、『遼東本より中國の地、隋氏四たび出師して得る能はず。朕今東に征し、中國の爲に子弟の仇を報い、高麗は君父の恥を雪がんこ

とを欲するのみ』と詳細に記録している。

太宗は貞觀十九年に高麗を親征し、蓋牟城(今の遼寧省蓋縣)、遼東城(今の遼寧省遼陽市)、建安城(今の遼寧省營口市の南東地區)を攻め落としたが、安市城(今の遼寧省海城市南)を攻撃した時に、二ヶ月たつても、攻め落とせなかった。九月の遼東は寒くて、太宗は悔しがりながら歸つたという。しかし、以上の中國の歴史書には、高麗を攻めた時、太宗の目に矢が當たつて逃げたという記録はない。

高麗末期の文臣・李穡^{十五} (一三二八―一三九六)の著作『牧隱集』牧隱詩藁卷之二「貞觀吟」に、「是を囊中の一物のみと謂ひ、那ぞ知らん玄花の白羽を落とすを」というのは、唐の太宗が高麗兵に目を射られたことを指している。羅山はこれに對して疑いを抱いた。中國の歴代の史書では、君主が負傷した史實を正確に記録している。例えば、鄆陵の戦い^{十六}で、楚の共王^{十七}が晋の大夫の呂錡^{十八}に目を射られたこと、漢の高祖劉邦^{十九}が淮南王の英布^{二十}を討伐する際に、流れ矢に當つたこと^{二十一}など、すべて記録されている。羅山は、鄆陵の戦いと淮南の役に關する中國の歴史書の記録によつて、朝鮮側の記述を否定し、ただ「私言」であつて、信頼できないものだと言張している。

質問四

〔原文〕異國貢調於本邦多矣。況貴國聘使、古今不可勝數。就中圃隱鄭夢周、當洪武十年、來聘于本邦。即是我永和三年也。距今二百數十歳。聞其名久矣。似聞此人性理之學、如有所傳。故有忠義之氣。

然要其終、則聞貴國殺之云爾。圃隱有何罪乎。行一不義、殺一不辜、聖賢之所不爲也^{二二}。貴國學聖賢之法、則彼罪狀得其情歟。

〔訓讀〕異國、本邦に貢調する多し。況や貴國の聘使、古今勝れて數ふ可からず。就中、圃隱鄭夢周、洪武十年に當りて、本邦に來聘す。即ち是れ我が永和三年なり。今を距ること二百數十歳。其の名を聞くこと久し。聞くに似たり、此の人性理の學、傳ふる所有るが如し。故に忠義の氣有り。然れども其の終を要むれば、則ち貴國之を殺すと爾云ふを聞く。圃隱に何の罪有りか。一不義を行ひ、一不辜を殺すは、聖賢の爲さざる所なり。貴國聖賢の法を學べば、則ち彼の罪狀其の情を得たるか。

羅山は、昔から日本に來朝した國が多くて、朝鮮使者も來貢し、數えきれないほどだと強調し、朝鮮を日本の藩國と見なしている。そして、洪武十年（一三七七）に來日した朝鮮使者の鄭夢周（一三七〇～一三九二）に言及している。

鄭夢周は、字は達可、號は圃隱。慶尚北道永川の人、高麗末期の儒學者、外交家で、朱子學に精通し、高麗恭愍王王禕九年（一三六〇）科擧に及第した。一三七七年、高麗が倭寇に侵されないよう、鄭夢周は日本に赴いた。彼は優れた才能と度胸によって高麗の俘虜を本國に連れて歸った。さらに、彼は「東方理學の祖」と稱し、その知識と詩文が日本で重んじられ、日韓兩國の文化交流に大いに貢獻した。鄭夢周は、四回も使命を帯びて明朝に赴き、先見性のある見識と智謀を發揮し、明朝との外交關係を修復した。

一三八八年、李成桂^{二三}（一三三五～一四〇八）がクーデター（威化島回軍）を起こして高麗の政權を握った。一三九二年、鄭夢周は李成桂と對立し、死んでも屈しない心持ちで、『丹心歌』を書き、自分の忠誠心を國にささげた。

羅山は鄭夢周に「忠義の氣」があると高く評價した。しかし、このような忠義の人は李氏朝鮮の君主に殺されてしまった。不義を行い、無辜を殺すのは、君子がすべきことではない。字面から見れば、羅山が使者に鄭夢周の罪狀を尋ねたが、言外の意は、朝鮮國王が忠臣義士を殺したのは、聖人の行爲とはいえないと批判しているのである。

質問五

〔原文〕本邦貴介公子^{二四}、講武之暇、頗愛放鷹。故養飼之術、不乏人也。貴國李爛所編『鷹鵠方』^{二五}書、有「草協」、有「栢部根」^{二六}、有「胡王師根」^{二七}、有「野人乾水」^{二八}。想其『鄉藥集成』有之歟。是何等藥物哉。須據中華之『本草』而告其異名。若其不然、俟其圖說、以廣異聞。又所謂「朱砂散」^{二九}所用猪肝者、家猪乎、野猪乎。昔白香山^{三〇}詠鷹云、「吾聞諸獵師。」今爲養鷹坊者、聊問焉。

〔訓讀〕本邦の貴介公子、武を講ずるの暇、頗る放鷹を愛す。故に養飼の術、人に乏しからざるなり。貴國の李爛の編む所の『鷹鵠方』の書に、「草協」有り、「栢部根」有り、「胡王師根」有り、「野人乾水」有り。想ふに其の『鄉藥集成』之有るか。是れ何等の藥物なるや。須らく中華の『本草』に據りて其の異名を告ぐべし。若し其れ

然らざれば、其の圖説を俟ちて以て異聞を廣めん。又、所謂「朱砂散」に用ゐる所の猪肝は、家猪か、野猪か。昔、白香山鷹を詠じて云く、「吾れこれを獵師に聞く。」と。今養鷹坊の者の爲に、聊かこれを問ふ。

これは、羅山が鷹狩りをした「貴介公子」のために、李燭撰『鷹鵠方』について質問したものである。しかし、内容の重點は放鷹ではなく、本草學に置かれている。羅山が思うに、『鷹鵠方』で言及している「草協」「栢部根」「胡王師根」「野人乾水」などの藥物は、『鄉藥集成』に見える。『鄉藥集成』（八十五卷）は李氏朝鮮初期の醫學書で、一四三三年に成立した。内容は中國の醫書を廣く参照している。羅山は、『鷹鵠方』では中國の本草類書物に基づいてこれらの生藥の異名を表記し、あるいは圖説すべきだと指摘し、さらに、「朱砂散」で使われた豚のレバーが家畜の豚か猪か、はつきり書いていないと指摘している。最後に、唐の時代の詩人・白居易の詩『放鷹』の句を引用し、使者に教えを請うている。

羅山は本草學に關心があつた。慶長十二年（一六〇七）、長崎で『本草綱目』を買い、家康に献上した。羅山の第三子の春斎がまとめた羅山の年譜（『羅山林先生集』附録卷一）には、羅山が實見した書名が列記されており、一般的に「既見書目」と呼ばれる。この「既見書目」には『本草綱目』という書名がある。また、羅山は『本草序列註』一卷、『本草綱目序註』一卷、『多識編』三卷などの本草學關係の書籍を著した。羅山は醫藥學に精通し、家康によく諮問された。

しかし、彼はこの學問を自然科學として探究するのではなく、漢文學や國語學の一部分として扱っていた。これによって、羅山の學問の限界性と觀念的な傾向が認められる^{三十一}。

羅山は放鷹の術について質問したというよりは、むしろ本草學を含む朝鮮漢文學の學問研究が嚴格ではないと批判している。なお、金仙熙は、この點にも論及している。

金仙熙の分析によると、羅山の『鷹鵠方』に關する質問の本質は、日本人が「武」に高い關心を持っていたからであり、日朝文人の「武の日本」に對する認識の差異を示している。ゆえに、羅山の鷹の養育法についての質問は、日本の文教を期待した朝鮮知識人にとつて、その「新しい徳川時代」という先入觀が崩された一例だと論難している^{三十二}。

しかし、羅山の質問から日本人が武を尊んだという特徴を見出すことはできないと思われる。羅山は寛永元年（一六二四）に「鷹贊」^{三十三}を執筆し、鷹を自分の雄志にたとえ、大丈夫は凌雲の志を持つべきだと励ましている。幕府の儒學者となつた羅山が、注目したのは學問の研鑽である。さらに、朝鮮通信使の來日の目的から言う^{三十四}と、日朝貿易の復活を促進するためであり、羅山は使者に質問する^{三十五}には、鷹で朝鮮に日本の武力を示す必要はなかつたと思われる。

質問六

「原文」貴國慵齋成文云、「湯泉在天地間、自爲一類。受性本然、未必有待而溫也。多在北方寒涼深山窮谷之間、非由炎氣而成矣。」殊

就貴國中、往往指示其沸涌處、浴洗處、以實之。乃排唐子西所謂炎州地性及硫黃礬石之說。雖然水中有火^{三三四}、老槐生火^{三三五}。雨中有雷火、野澤有燐、蜀國井底有火^{三三六}。又火山雖霪雨、火常燃。焉知陰嶺塞谷土底無硫黃哉。凡溫泉臭多而不臭少、其氣似硫黃、則子西之說、未易輕証也。自憐耳目隘、未測陰陽。故請詳其說。

「訓讀」貴國の慵齋成の文に云く、「湯泉天地の間に在り、自ら一類を爲す。性を受くること本々然り、未だ必ずしも待つこと有りて溫めざるなり。多く北方寒涼の深山窮谷の間に在り、炎氣に由りて成るに非ず。」と。殊に貴國の中に就いて、往往にして其の沸涌する處、浴洗する處を指し示し、以て之を實にす。乃ち唐子西の所謂炎州の地性及び硫黃礬石の說を排す。然りと雖も、水中に火有り、老槐火を生ず。雨中に雷火有り、野澤に燐有り、蜀國井底に火有り。又、火山霪雨と雖も、火常に燃ゆ。焉ぞ陰嶺塞谷土底に硫黃無きを知らんや。凡そ溫泉臭多くして臭ならざる少し、其の氣硫黃に似れば、則ち子西の說、未だ輕しく証るに易からざるなり。自ら耳目の隘を憐れみ、未だ陰陽を測らず。故に其の說を詳にせんことを請ふ。

慵齋成は、成俔（一四三九～一五〇四）である。字は磬叔、號は慵齋、虛白堂。李氏朝鮮初期の名臣、學者で、『慵齋叢話』（全十卷）を著した。『慵齋叢話』は李氏朝鮮初期に朝廷と民間、及び士大夫の間に傳わった奇談や傳説、風習などを記録した作品である。その中に、中國文學における遺聞、怪異小説、笑話などを母體とし、あるいは中國文學の地理志、風習志などの文體の叙述方法を參考にして

おり、中國文學と緊密な關係がある^{三七七}。

羅山は次のように『慵齋叢話』（『大東野乘』卷之二（朝鮮群書大系、『正』二十四輯續二十四輯續々二十四輯別集七輯、朝鮮古書刊行會、一九〇六～一九一六）卷九の内容について質問している。

唐子西『論湯泉記』に云く、「或ひと説く、炎州の地性酷烈にして、故に山谷に湯泉多し。或ひと説く、水硫黃より出で、地中即ち溫かく、初めより南北を問はず。今、臨潼の湯泉乃ち正西在りて、炎州の餘水、未だ必ずしも皆熱からざれば、則ち地性の説固より已に之を失ふ。然れども硫黃を以て水中に置き、水熱き能はざれば、則ち硫黃の說亦た未だ得るとなさず。吾意へらく、湯泉は天地の間に在り、自ら一類となす。性を受けて本より然り、未だ必ずしも待つ有りて溫かならざるなり。」と。今、我が國六道、皆溫井有りて、惟だ京畿、全羅道これ無し。（中略）今を以て之を觀れば、溫泉多くは北方寒涼深山窮谷の間に在り、炎氣に由りて明を成すに非ず。水性も亦た各々類有り、而して其の理未だ測料すべからざるなり。

成俔は北宋の詩人・唐子西^{三八}（一〇七〇～一二二〇）が著した『游湯泉記』の内容を引用している。『游湯泉記』の原文は以下のようにある。

水北十餘里、白水山を得。山行一里、佛跡院を得る所なり。院中に二泉湧く。其の東は所謂湯泉、其の西は雪如なり。二泉相去ること歩武の間にして、東泉熱きこと甚だしく、殆んど指を觸るべからず。西泉を以て之を解きて、然る後に調適して浴

すべし。意へらく、山の二泉を出だすは、専ら浴者の爲に計るか。或ひと説く、炎州の地性酷烈にして、故に山谷湯泉多しと。或ひと説く、水は硫黄より出で、地中即ち温かく、初めより南北を問はず。今、臨潼湯泉乃ち正西に在りて、炎州の餘水、未だ必ずしも皆熱からざれば、則ち地性の説固より已に之を失ふ。然れども硫黄を以て水中に置き、水温かきこと能はざれば、則ち硫黄の論も亦た未だ得となさず。吾意へらく、湯泉天地の間に在り、自ら一類をなす。性を受くること本より然り、必ずしも待つ有りて然る後に温かならざるなり。凡そ物各々其の類を求めて、水性尤も耿介なり。其の類を得れば、則ち數千萬里と雖も、伏流にして相通ず。其の類に非ざれば、則ち横絶經過、十字旁午にして、相入らず。故に二泉の間、尋常を容るる能はずして、炎涼の特に異なること此の如し。蓋し亦た怪しむに足る無きは、氣を吹けば寒と爲り、氣を呵すれば温と爲りて、同じ一口より出づ。此れ其の證なり。（『眉山唐先生文集』卷八）

温泉生成の原因について二つの説がある。一つは「炎州の地質は苛酷」で、もう一つは「硫黄を含んだ水は、地中にすでに温かい」ということである。しかし、臨潼湯泉は西の方位にあり、炎州の餘水は必ずしも熱いとは限らないので、地性の説はすでに通用しない。硫黄を水に置けば、水は暖かくならないので、硫黄の論も正しくない。唐子西によれば、この二説は間違っている。その理由は、温泉が天地の間にみずから一類となり、その性質が本来そのようである。二つの温度の違う温泉は、も

とより一つの口から湧いてくる。これは、息を吹いたら寒く、息を吐いたら温かいという道理と同じであるという。

成俔は唐子西の説をそのまま引用し、さらに「今、我が國六道、皆温井有りて、惟だ京畿、全羅道これ無し」と述べ、唐子西の説を認めている。李氏朝鮮太宗十三年（一四一三）、朝鮮半島は八つの行政区に分けられ、八道とよばれる。京畿道と全羅道はそれぞれ朝鮮半島の中中部と南部にある。成俔は、朝鮮の温泉が北の寒冷地にあり、中南部の温暖と炎熱の地域にはないので、「炎州地性」の説が間違っていると論證している。

これに對して、羅山は、臭い温泉が多く、臭くない温泉が少なく、その匂いは硫黄に似ているので、生成の原因は山の中に硫黄があることだと主張している。彼は、唐子西が否定した「硫黄の論」を支持し、成俔が唐子西の説を排斥したことを責めている。

ただし、羅山は當時、成俔の文章を讀んではいたが、唐子西の原文とは對照しておらず、文中の「吾意」を成俔の見解と誤解しているようである。さらに、斷章取義で、「地性の説」と「硫黄の論」はすべて唐子西の説だと勘違いしている。彼は温泉の成因を究明したのではなく、朝鮮學者成俔の「誤り」を批判し、使者を困らせて揶揄しようとしたのではなからうか。

質問七

「原文」貴國先儒退溪李滉、專依程、張、朱子說、作四端七情、分理氣辯、以答奇大升。其意謂「四端出於理、七情出於氣」。此乃朱子

所云、「四端理之發、七情氣之發」也。末學膚淺、豈容喙于其間哉。退溪辯尤可嘉也。我會見其答、未見其問。是以思之、其分理氣則曰、「太極理也、陰陽氣也」^{三十九}、而不能合一、則其弊至於支離歟。合理氣則曰、「理者、氣之條理也。氣者、理之運用也」^{四十}、而不擇善惡、則其弊至於蕩妄歟。方寸之内、所當明辨也。大升所問果如何。

「訓讀」貴國の先儒退溪李滉、専ら程、張、朱子の説に依りて、四端七情を作りて、理氣を分ちて辯じ、以て奇大升に答ふ。其の意に謂らく、「四端は理より出でて、七情は氣より出づ」。此れ乃ち朱子云ふ所の「四端は理の發、七情は氣の發」なり。末學膚淺にして、豈に喙を其の間に容れんや。退溪が辯、尤も嘉す可きなり。我れ會て其の答を見るも、未だ其の問を見ず。ここを以て之を思ふに、其の理氣を分かちて、則ち「太極は理なり、陰陽は氣なり」と曰ひて、合一する能はざれば、則ち其の弊、支離に至るか。理氣を合して、則ち「理は、氣の條理なり。氣は、理の運用なり」と曰ひて、善惡を擇ばざれば、則ち其の弊、蕩妄に至るか。方寸の内、當に明かに辨すべき所なり。大升が問ふ所、果して如何。

羅山は早年から朱熹（一一三〇～一二〇〇）の理氣論に對して疑問を持つていた。彼は二十二歳の時、吉田玄之を介して藤原惺窩（一五六一～一六一九）に宛てた書簡の中で、

太極は理なり、陰陽は氣なり。太極の中、本より陰陽有り、陰陽の中も亦た未だ嘗て太極有らざんばあらず。五常は理なり、五行は氣なりも、亦た然り。是を以て或ひは理氣分かつべから

ずの論有り。勝（羅山）、其れ朱子の意に戻るを知ると雖も、而れども或いは強ひて之を言ふ。知らず足下以て如何と爲す。（『羅

山林先生文集』卷第二「寄田玄之」）

と述べている。理氣二元論は朱子が唱えた萬物の形成と起源に關する重要な學説である。朱子は、「所謂理と氣とは、此れ決して是れ二物なり」（『朱子文集』卷四十六「答劉叔文」）と述べているが、理と氣の關係を説明する時には、「天下未だ理無きの氣有らず、亦た未だ氣無きの理有らず」（『朱子語類』「理氣上・太極天地」第十條）「理は未だ嘗て氣を離れず」（同上）とも述べている。「理は先に在り、氣は後に在り」、「是の理有れば、便ち是の氣有り、但し理は是れ本なり」「未だ天地有らざるの先、畢竟是れ先ず此の理有り」（同上）などと述べ、理が萬物の本源であることを強調し、理の絶對性を認めている。朱子の理氣二元論は理を中心とするものである。理は、世界の本源であり、本體である。氣は、萬物を構成する材料であり、具體的で運動するものである。理は形而上の本體的存在で、氣の運動は形而下の現象、作用である。

羅山は、理と氣の關係に悩み、王陽明（一四七二～一五二九）の説に傾いたことがある。彼は、「理と氣は一か、二か。王守仁曰く、『理は氣の條理、氣は理の運用なり』（『羅山林先生文集』卷第六十七「隨筆三」）「古今、理氣を論ずる者多し。未だ焉を過ぎる者有らず、獨り大明の王守仁、『理は氣の條理、氣は理の運用なり』と云ふ」（『羅山林先生文集』卷第六十八「隨筆四」）と述べている。羅山の見解を明らかにするために、まず、朝鮮における四端七情の論争につ

いて見ておこう。

(一) 朝鮮における四端七情の論争

朝鮮儒學史上では、四端七情と理氣に關する論争は朱子學の主要な課題となっている。その發端は李退溪^{四十一}（二五〇一～一五七〇）と奇高峰^{四十二}（二五二七～一五七二）の間の四七論争である。

四端七情の論争は李退溪が鄭秋巒^{四十三}（二五〇九～一五六二）の『天命圖說』の「四端は理より發し、七情は氣より發す」について、「四端は理の發、七情は氣の發」と改めたことに對して、奇高峰が異論を唱えたことに始まる。「四端は理の發、七情は氣の發なり」の出典は、『朱子語類』である。

「四端は理の發であり、七情は氣の發である。」質問、「喜怒哀愛惡欲のように見たが、仁義に似ている。」（朱子の）答え、「固より似ているところがある。」（『朱子語類』「孟子三・公孫丑上之下・人皆有不忍人之心章」）

これについて、朱子は詳しく解説していない。中國儒學史上で四端七情と理氣と關連づけて論じるのは少ない。しかし、この問題は朝鮮では重視され、よく論及された。四端七情論は朝鮮で三百年以上も續いている。李退溪と奇高峰は往復書簡の形式で自分の見解を説いている。李退溪と奇高峰の各自の見解については、近年の代表的な研究成果を次に挙げる。

羅安憲によれば、李退溪は理と氣を「不離」の關係にあるとしつつも、理は畢竟理であり、氣は畢竟氣であり、理即ち氣、氣即ち理とすることができないと主張している。また、理と氣の分屬の違い

によつて、天地の性と氣質の性の區分があり、四端と七情の區分もある。四端には、理が發して氣が随い、七情には、氣が發して理がそれに乗るといふ^{四十四}。これは、李退溪の四端七情の論の基本的な見方である。

一方、李甦平は、奇高峰の理氣論を以下の三點にまとめている。一、理と氣は一つのものではない。二、一切の現實的に存在するものは必ず理と氣により構成され、そのうちどちらかが欠けてもだめである。三、「四端は理より發し、七情は氣より發す」というのは、理と氣を二つに分けているので、朱子の思想と一致しない^{四十五}。

羅山は李退溪と奇高峰の論争について「曾て其の答を見て、未だ其の問ふを見ず」と言い、さらに「大升が問ふ所、果して如何」と問い詰めている。羅山はわざと使者の答えられない質問を投げたという可能性があるように思われる。次に、朝鮮側の記録に基づいて、羅山の意圖を分析したい。

(二) 羅山の意圖

朝鮮副使の金世濂『海槎錄』（『東溟集』所收）では、寛永十三年の訪日時的全行程を詳細に記録している。その中の「十二月十三日癸未晴」の條に、羅山とのやり取りが見える。

是の日、道春至り、經史中の難解の處六十餘條を拈出し以て問ふ。字畫文辭、粲然として觀るべし。遂に之に答ふ。又、理氣の先後、四端七情の分を論ず。往復すること三四たび、辨論已まず。辭少しく屈するが若し。乃ち曰く、「李退溪、奇高峰の論ずる所儘く好く、高峰の説やや勝る」と。又曰く、「圃隱曾て

命を奉じて此に到る。既に是れ理學の師宗なり、王者は、一つの事あらざるを殺して、天下を得るを爲さず。圃隱、其の死を得ざるは何ぞや」と。問ふ所皆此の類なり。

又、理學の工夫を論ず。其の説、頓悟の旨多し。余、答へて曰く、「此れ乃ち釋氏の派なり、仲尼の徒の道はざる所にして、吾、未だ之を學ばず」と。

道春書を得て、頓首にして曰く、「使臣の言、我を藥石するなり。我が國の學問、皆禪より出づ。所以に此の患有り。如一人に孔氏の學に歸せんと欲すれば、則ち當に何に修むべくして可なるか」と。

余（金世濂）、答へて曰く、「其の工夫の梯級は、則ち格物、致知、誠意、正心より、平天下に至る。其の倫は、則ち父子親しむ有りより、朋友信有るに至る。其の制は、則ち冠昏喪祭なり。其の文は、則ち『詩』『書』『易』『春秋』なり。聖人の道は、俱に方冊に在り。歸りて之を求むれば、自ら師を得べし」と。

道春喜びて曰く、「敬みて命を聞かん。今は、我、官制を改めて、服色を易へんと欲す。願はくは貴國の制度及び中朝の官制を聞かん。」仍つて漢、唐、南北朝、金、元、大明の官制を學ぐ。論難蜂起し、専ら辯の博きを以て自ら高くす。（『東溟集』卷十

『海槎錄』、韓國文集叢刊第九十五輯、民族文化推進會、一九九

金世濂の記録から見れば、實際に、羅山は奇高峰の説を知っているだけではなく、「高峰の説やや勝る」という見解を示している。辯

論中に羅山のしぐさについて、金世濂は「辭少し屈するが若し」という言葉を使っている。金世濂は羅山と違つて李退溪の説を支持していることが分かる。もし金世濂の記録が事實であつたら、羅山は使者との論辯において優位に立てなかつた。羅山が朝鮮儒學における難問の「四七論争」について質問を出した。意圖は使者の學術水準を圖ることにあつたと思われる。

三、朝鮮側の記録

羅山は宗義成を通じて、書簡「寄朝鮮國三官使」を使者に寄せた。羅山の『文集』では、この書簡の最後に、「此の書、宗對馬守義成に憑りて、三使に示すと雖も、然れども答ふる能はず」と書いている。しかし、朝鮮使者の著作には、羅山からの書簡が届いたという記録がない。宗義成がこの書簡を使者に渡したかどうか分らない。だが、前述の金世濂の記録によれば、羅山が十三日に使者と會見した時に質問した内容は、例えば圃隱の死、放鷹の術など、だいたい裏付けが取れる。答えられない質問については、金世濂が一々記録せずに「問うた所は皆此の類」とだけ書いている。

また、羅山と三使者との會見の前夜、つまり十二月十二日の夜に、宗義成は將軍に謁見する儀禮について使者と相談していた。謁見の禮儀作法は日朝兩國の外交關係に深い関わりがあつて、慎重に對應するのは當然なことである。しかし、羅山の意見は使者を怒らせた。「十二日壬午晴留江戸」の條で、金世濂は次のように記録している。

夜、義成來りて言ふ、「諸執政、大君の前に會し、傳命の禮貌を議定す。大炊曰く、『我、大君の命を以て往きて使臣に見え、朝鮮の揖禮を行ふ。使臣大君に見ゆるに、亦た當に日本の禮を行ふべし』と。道春曰く、『頃ごろ聞く、我が國の使臣の朝鮮に往くや、庭に禮を行ふと。朝鮮の使臣我が國に來りて、獨り庭に拜せざるか。宜しく庚寅の故事に仿ふべし。大君當に交椅に坐り、使臣の禮を行ふを受くべし』と。大君、持難の意有りとも、此の人等、再三力爭し、此の兩説を以て恭酌す。之を定めて曰く、『朝鮮、毎に日本を以て禮を知らずと爲す。今、若し仍つて謬例に循ひ、改定を爲さざれば、則ち必ず未だ一向に朝鮮に笑を貽すを免れず』と云ふ。故に俺、極めて以て悶と爲し、敢へて此に先に告ぐ」と。

余等曰く、「貴國務めて禮を知らんと欲して、反つて未だ失禮の歸を免れず。亦た一笑するに足る。所謂庚寅の故事は、何れの時の事か。家康の定規に法らず、兇逆の秀吉に法らんと欲す。此れ禮を知ると謂ふべきや。若し此の禮を行へば、死有るの外、斷じて従ふべからず。速やかに歸へて報ずるを爲し、百年の鄰好を壞す無かれ」と。峻斥にして以て送る。（『東溟集』卷十『海槎錄』、韓國文集叢刊第九十五輯、民族文化推進會、一九九二）

羅山の言う「庚寅故事」とは、庚寅年間（一五九〇）に朝鮮が豊臣秀吉の要請に應じて、黄允吉^{四十六}（一五三六〜？）、金誠一^{四十七}（一五三八〜一五九三）等を通信使として日本に派遣したことである。來日した通信使と日本側との間にいろいろな摩擦が生じた。朝鮮側

から見れば、摩擦の發生した原因は日本側の招待が失禮だったからである。

十六世紀中葉以來、日本はすでに明朝に朝貢しておらず、明の皇帝による冊封も受け入れなかった。秀吉の天下統一を果たした後、明朝征服を企てて、一五八七年に朝鮮に使者を派遣するよう要請した。その實質的な目的は朝鮮を臣服させたいということであった。一方、それまで「小中華」と自任していた朝鮮は、自國中心の朝貢體系を構築しようとしていた^{四十八}。そこで、日朝間のもめごととは偶然ではなかった。當時、羅山が豊臣秀吉時代の接待方式を用いたいと考えていたことから、彼の朝鮮に對する強硬な姿勢を窺える。

「庚寅故事」は朝鮮使者にとっては、屈辱だったので、使者は憤然として「若し此の禮を行へば、死有るの外、斷じて従ふべからず」と拒否した。このことは、正使任統の著作『丙子日本日記』^{四十九}と黄屎の著作『東槎錄』^{五十}にも記載されている。

要するに、「寄朝鮮三官使」では、羅山が使者に出した朝鮮の歴史、漢學、本草學、理學などに關する質問は、中國の文獻に基づいて、朝鮮の學問を反駁したものである。その激しい言葉遣いは、彼自身の博覽強記と博學多才の側面を示す一方、日本は島國だが、輕視されるのを許さないと使者に伝えるためのものであった。羅山が示した強硬な姿勢と横柄な態度は、朝鮮使者の記録からも窺える。

おわりに

通信使外交は、江戸時代における日本と朝鮮との重要な外交政策である。初期の徳川幕府にとって、朝鮮との往來は、政治上必要であつただけではなく、江戸時代の文化的繁榮と經濟成長に不可欠であつた。朝鮮と違って、日本は昔から華夷秩序のもとで中國とつかず離れずの關係を長年保つていた。中華文明から養分を十分に吸収した日本は、徐々に独自の文化を作り出し、自國を中心とする新たな外交關係と東アジア秩序の構築を圖つていた。江戸時代初頭、幕府の知識人の代表人物として、羅山は驚嘆すべき學識と才能を有し、さらに高い政治的感受性と外交意識を備えていた。彼が朝鮮使者に宛てた書簡に見える高慢な態度は、彼の博學多才と幕府での高い地位に由來し、さらに重要なのは、秀吉の朝鮮出兵による從來の東アジア秩序への挑戦、および日本の國力の充實と文化の繁榮に深くかかわつていた。

「寄朝鮮國三官使」の内容から言うと、羅山が質問した意圖は、朝鮮の學者より高い學識と才能を見せ、日本の文教水準をあらわすためである。しかし、その質問のよりどころは中國の思想と歴史觀の束縛から脱却することはできていない。日本は東アジア文化圏の一員として、生活風習から思想文化に至るまで、禮儀作法から政治意識に至るまで、ことごとく中華文化の影響を受けている。江戸時代初期における日本の學問もまた中國思想の影響を受けていた。新秩序の構築には、強大な思想體系の支えが必要である。羅山の生きた

時代は、西洋思想がまだ浸透しないので、中國の支配的なイデオロギーである儒家思想、特に宋明理學が彼の思想の重要な一部となつていた。羅山は日本を「神國」と稱し、朝鮮を日本の藩國とみなそうとした。江戸の思想文化の發展の黎明期における羅山の思想には、彼の強い國家意識が認められる。

(かん がせん・言語文学専攻)

注

一 林羅山は、名は信勝、字は子信、法號は道春。

二 任統は、字は子灝、號は白麓。李氏朝鮮中期の文臣。一六〇九年に、李氏朝鮮の科擧である司馬試に合格した後、成均館に入る。秀才と稱せられ評判が高かつた。著作には『丙子日本日記』がある。

三 金世謙は、字は道源、號は東溟。李氏朝鮮中期の文臣。一六一五年に生員・進士試に合格し、一六一六年に増廣文科に狀元で及第した後、禮曹佐郎になり、侍講院司書を兼任した。一六一七年に侍講院正言になった。著書には『東溟集』『海槎錄』などがある。

四 黃辰は、字は子由、號は漫浪、青丘。李氏朝鮮後期の文臣・學者。著作物には『漫浪集』がある。

五 阿部吉雄「林羅山と朝鮮儒學」(『日本朱子學と朝鮮』東京大學出版會、一九六五)では、羅山と朝鮮通信使とのやりとりを言及した。「寄朝鮮國三官使」(『羅山先生文集』卷第十四所収)については、羅山の質問には朝鮮國として差し障りのある質問が多かつたと指摘し、さらに、羅山の實證的に合理的な史觀、倫理觀があらわれていると述べている。

六 李元植「林羅山と朝鮮通信使」(『朝鮮學報』第百十九・百二十輯、朝

七 鮮學會、一九八六)では、日韓兩國の善隣友好の角度から、林羅山と通信使の交歓の實態を探っている。寛永十三年の第四回目の交渉では、羅山が副使金世謙に聖賢圖像の贊を書写してもらい、學士權伏との唱和の實態述べたが、「寄朝鮮國三官使」(前掲)という文書について、阿部吉雄「羅山の合理的史觀、倫理觀」の説をとっている。

金仙熙「十七世紀初期く中期日朝知識人の他者像——林羅山と朝鮮通信使の筆談によせて——」(廣島大學大學院教育學研究科紀要、第二部第五〇號、二〇〇一)では、林羅山と朝鮮通信使と六回の筆語を論述することを通じて、朝鮮知識人にとって日本は秀吉時代と同じく、「文明」から遠い「武人」兵の優位の國だと述べ、羅山は朝鮮を朝貢國とみなして、朝鮮の知識人から損傷されたプライドを修復すると語っている。

八 五山は、禪宗の臨濟宗で最高の格式をもつ五つの大きな寺。

九 『周易』「觀卦」に「六四、觀國之光、利用賓於王」とある。「象傳」に「觀國之光、尚賓也」とある。杜甫『奉贈韋左丞丈二十二韻』に「甫昔少年日、早充觀國賓。讀書破萬卷、下筆如有神」とある。

十 文科大學史誌叢書、吉川半七、一九〇四、國立國會圖書館所收。

十一 金富軾は、字は立之、號は雷川、諡號は文烈。

十二 『三國志』魏書三十「韓傳」に「韓在帶方之南、東西以海爲限、南與倭接、方可四千里。有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰辯韓」とある。

十三 『後漢書』「東夷列傳」に「韓有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰辯韓。馬韓在西、有五十四國、其北與樂浪、南與倭接。辰韓在東、十有二國、其北與濊貊接。辯韓在辰韓之南、亦有十二國、其南亦與倭接」とある。

十四 『尚書』「洪範」に「武王勝殷、殺受、立武庚、以箕子歸。作『洪範』」とある。

十五 李穡は、字は穎叔、號は牧隱。

十六 鄆陵の戦いは、春秋時代の紀元前五七五年に、鄆陵(今の河南省鄆陵縣)にて晋と楚の戦いを指す。『史記』「楚世家」に「共王十六年、晋

伐鄭。鄭告急、共王救鄭。與晋兵戰鄆陵、晋敗楚、射中共王目」とある。

十七 共王(前六〇〇〜前五六〇)は、前五九〇〜前五六〇年在位。姓は牟、氏は熊、諱は審、または箴。春秋時代の楚の第二十四代の君主。

十八 呂錡(生没年不詳)は、魏錡、厨武子ともいう。

十九 劉邦(前二五六〜前一九五)は、前漢の初代皇帝、前二〇二年〜前一九五在位。

二十 英布(生年不詳〜前一九六)は、秦末から前漢初期にかけての武將、通稱は黥布。

二十一 『史記』卷八「高祖本紀」に「高祖擊布時、爲流矢所中、行道病」とある。

二十二 『孟子』「公孫丑上」に「行一不義、殺一不辜而得天下、皆不爲也」とある。

二十三 李成桂は、李氏朝鮮の初代王で、一三九二〜一三九八年在位。

二十四 晋・劉伶『酒德頌』に「有貴介公子、搢紳處士、聞吾風聲、議其所以」とある。

二十五 李燾『新增鷹鶴方』(書写年不明)。國立國會圖書館には、日本寛永二〇年(一六四三)に刊行された版本がある。

二十六 李燾『新增鷹鶴方』「調養雜說・救急方」に「又虱子、浴草協湯。又梨萋根、栢部根、二味爲末、加輕粉、黃連細研、裏飼爲妙」とある。

二十七 李燾『新增鷹鶴方』「調養雜說・救急方」に「脚趾浮腫者、謂足項匿。針破後、胡王師根納針穴」とある。

二十八 李燾『新增鷹鶴方』「調養雜說・救急方」に「若喘急、大黃細末裏肉飼之……又野人乾水浸肉飼之」とある。

二十九 李燾『新增鷹鶴方』「調養雜說・救急方」に「朱砂散、朱砂研、雄黃研、各一分……納猪肝肉、以葉包裹、用童便煮熟」とある。

三十 白居易(七七二〜八四六)は、唐の時代の詩人。字は樂天。號は香山居士。詩作「放鷹」は『全唐詩』卷四百二十四に收録される。「放鷹」

に「聖明馭英雄、其術亦如斯。鄙語不可棄、吾聞諸獵師」とある。

三十一 堀勇雄『林羅山』（人物叢書一八、日本歴史學會編集、吉川弘文館、一九六四）第一三二～一三四頁を参照。

三十二 金仙熙「十七世紀初期～中期日朝知識人の他者像——林羅山と朝鮮通信使の筆談によせて——」（前掲）を参照。

三十三 『羅山林先生文集』卷四十六・贊上「鷹賛」に「鳥中有凌雲之志者、鷹也。古人呼曰、『決雲兒』。故仰則羽族遠遁、俯則毛群伏室。嗚呼、大丈夫可雄飛、不可雌伏。可以人而不如鳥乎」とある。

三十四 『莊子』「外物」に「陰陽錯行、則天地大絀、於是乎有雷有霆、水中有火、乃焚大槐」とある。

三十五 『淮南子』「汜論訓」に「老槐生火、久血爲磷、人弗怪也」とある。

三十六 『後漢書』志第二十三「郡國五」では、「臨邛」について李賢の注に「博物記曰、『有火井、深二三丈、在縣南百里。以竹木投取火、後人以火燭投井中、火即滅絕、不復然。』蜀都賦注曰、『火井欲出其火、先以家火投之、須臾許隆隆如雷聲、爛然通天、光耀十里、以竹筒盛之、接其光而無炭也。取井火還、煮井水、一斛水得四五斗鹽、家火煮之、不過二三斗鹽耳』」とある。西晉・張華『博物志』卷二に「臨邛火井一所、從廣五尺、深二三丈。井在縣南百里、昔時人以竹木投以取火。諸葛丞相往視之。後火轉盛熱、盆蓋井上、煮鹽得鹽、入於家火即滅、訖今不復燃也。酒泉延壽縣南山名火泉、火出如炬」とある。

三十七 李紅梅『「慵齋叢話」研究』（延邊大學、二〇〇五）を参照。

三十八 唐子西は、名は庚、字は子西、魯國先生とよばれる。眉州（今の四川省眉山市）の人。

三十九 『朱子語類』「性理二・性情心意等名義」第二十條に「太極是理、形而上者。陰陽是氣、形而下者」とある。

四十 王陽明『傳習錄』「答陸原靜書」に「理者、氣之條理。氣者、理之運用。無條理則不能運用。無運用則亦無以見其所謂條理者矣」とある。

四十一 李退溪は、名は滉、字は景浩、季浩。退溪、陶翁、清涼山人、眞宝人

と號した。諡號は文純。李氏朝鮮の有名な儒學者で、朱子學の代表人物。

四十二 奇高峰は、名は大升、字は明彦、號は高峰、李退溪の弟子。

四十三 鄭秋轡は、名は之雲、字は靜而、秋轡はその號。

四十四 羅安憲「李退溪與奇高峰關於四端七情的論辯」（『孔子研究』二〇〇九年第四期）を参照。

四十五 李甦平「論奇大升理氣混淪的儒學思想」（『社會科學戰線』二〇一五年第一期）を参照。

四十六 黃允吉は、字は吉哉、號は友松堂。

四十七 金誠一は、字は士純、號は鶴峯。諡號は文忠公。

四十八 劉永連、謝詳偉「華夷秩序擴大化與朝鮮、日本之間相互認識的偏差——以庚寅朝鮮通信日本爲例」（『世界歷史』二〇一五年第二期、中國社會科學院世界歷史研究所）を参照。

四十九 『海行摠載』第二卷（朝鮮群書大系續々第四輯、朝鮮古書刊行會、一九一四）所収。

五十 『海行摠載』第三卷（朝鮮群書大系續々第五輯、朝鮮古書刊行會、一九一四）所収。